



Title	Graham Greene の研究
Author(s)	新井, 章慶
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1967, 7, p.74-86
Issue Date	1967-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9532
Right	

This document is downloaded at: 2020-11-25T02:07:25Z

Graham Greene の研究

新 井 章 慶

私の目的は、グリーン的主要作品中にあらわれる諸人間像をとおして、彼の生追求の特質を抽出することである。それは、あくまでグリーン芸術のこゝろをさぐるための作業であって、彼特有のあの簡潔な文体のなかに凝縮された感情とイマジネーションの高い密度にまで触れることはできなかった。

“不幸にみちたこの世界で幸福を期待することは何んと愚かなことだろう。もしこの世に幸福者がいるとしたら、彼は利己主義者か、無知な人間だ” 岸にひきあげられた敵潜水艇による遭難者たちの惨状をまのあたりに見たとき、Scobie (The Heart of the Matter) は一切の不幸の重みが自分の肩にかゝってくるのを感じる。これは、彼があらゆる人間たちと分ちあわねばならぬ責任であると思う。“人間であるためには苦しみのさかずきを飲まねばならぬ” また彼は思う“あの安らかそうで自由な、とおく明るい遊星たちでさえ、もし人がほんとうの事を知ったら、それらにさえ<あわれみ>をかけないではおれないだろう。苦しみこそ事物の真相ではないか” 彼は人生の裏小路にうめくどんな苦しみの声にもするどく感応し、それに決して無関心でおれなかった。その Scobie が、二人の女を同時に深く愛したのは、やはりそのような彼の無私なあわれみのためであった。

一人は妻ルイスである。彼女は、夫の Scobie が昇進のチャンスはずされたために世間態をひじょうに苦にする。後進から追いつめられることは、彼自身にとっては打撃とならないが、そのために妻が不幸であることは、たまらない苦痛であった。ふだんから、つよい自尊心のために人に好かれない妻。そして“蚊帳のなかに坐っている彼女は、まるで金網のかぶさっている肉のかたまりのように醜い” そんな妻にたいする<ふびんさ>は情熱にまで達する。彼は、

必死の金策によって、妻のねがいどおり彼女を他国へ静養にやることが出来る。彼が愛したもう一人の女は、ヘレンという海の遭難者のひとりであった。（それは妻の不在中のことであった）“まるで占師の古びたカードのように”，薄幸の過去をきざんだヘレンを幸福にしてやることに彼は責任を感じず，“美しい者、かしい人間たち”のことはどうでもいゝが、誰ひとり見向きもしない、醜い女ヘレンこそは彼が責任をもたねばならぬ女であった。“灯りの下にふりむく彼女の顔のみにくさは、彼の両手にかゝった手錠のように”彼をしっかりと〈あわれみ〉の情にしばりつけてしまった。孤独だったヘレンは、Scobie の温い情愛をかてとして喜びを知る女となった。しかし、ふとした事から、〈あわれみ〉は〈あわれみの姦通〉へと発展していった。

やがて Scobie の妻ルイスの帰国を知ったとき、ヘレンの執愛は絶頂に達する。彼女は、Scobie が自分と手を切ったら、自分は自殺するか、身をもちくずすかのどちらかしかないと思うほどに悩む。そして Scobie の内部には、あの没我性の天使ムーシュキン（ドストエフスキー「白痴」）が生きていた。彼は罪の意識のゆえに、いっそう悲劇的なムーシュキンであった。彼は相手の幸福のためには、“自己の守るべき美徳でさえも罪悪のように”投げすてねばならなかった。ヘレンとの愛欲関係を断つことは、むしろ彼にとっては甘い誘惑でさえあった。それは平和と美徳が彼によみがえることを意味していたからである。しかし“ひとりの人間を犠牲にして、神を愛することができるだろうか” Scobie はあえて、ヘレンとの愛欲に自己を〈いけにえ〉に供するのである。我々は、この彼の愛欲行為に、すさまじい自己否定のストイシズムがかくされていることを見のがしてはならない。

“人は二人の女を愛することはできないという。しかし、この自分の、二人の不幸な女たちへの恐るべき〈いとしみ〉のこゝろが愛でなくて何んだらうか”だが、自分は、そうあることによって、彼らのどちらをも苦しみにつき落すことがあってはならない。ついに彼は決意する。姦通によって神をけがすことをやめ、また二人の苦惱を最小限度にとゞめる唯ひとつの絶望的な道は、病死とみせかけた自殺しかない。自殺のむくいはいは永遠の地獄である。彼はそれを信じている。“おゝ、神様、わたしは、あなたに永遠の呪い（という捧げも

の)をお捧げいたします。それを二人の幸福のためにお使ください”彼は、最後に妻とヘレンのそれぞれに “I love you.” の言葉をのこして、死んでいく。まるで悪徳にまみれた汚物のように、自分自身を彼らの道から掃きすて、しまうのである。

“絶望は、ゆるしがたい罪であるというが、それは墮落した人間がけっして経験することのない罪である。彼はつねに希望をもつ。善意の人のみが絶望という呪いを甘受する能力をもっているのだ”と作者はいう。我々は Scobie の愛しかたの愚かしさを指摘することはできる。しかし我々が安泰なのは、実際は我々のこゝろが、他人の不幸感にまきこまれるには、あまりに冷たいということかも知れないのである。彼の昇進があらためて定ったとき、彼は満足しきった妻の顔のうえに、別の顔々が映ってくるのが見える。それは、あの海で惨死した男女や不遇な仲間たちの顔々であった。また、彼が服毒による死の寸前に見たところの幻覚は何んだっただろうか。それは嵐をはらんだ夜の戸外で、彼の助けを求めている見知らぬ人の叫び声であった。彼はよろよろと立ちあがって、また倒れ死んでいく。この世の犠牲者のさげびは、彼自身が今おちていく永遠の地獄よりも重大だったのである。

このような Scobie の他苦へのするどい感受性は、グリーン的主要作品の主人公たち殆んどによって共有される特質である。たとえば、戦争犠牲者たちの惨たんたる死にざまを黙視できなくなったニヒリストの Fowler (A Quiet American)。心のよこびを奪われた一人の女への献身的援助をとおして「人は他のために苦しむとき、はじめて人間の何んたるかゞ分る」と言う Query (A Burnt-Out Case) がそうである。

それでは、Scobie の、人間世界の苦と不幸にたいする鋭い反応はどういう形であられるかについて考えてみたい。彼の反応のしかたは明かに政治的でない。たとえば、警察官の彼は、貧乏人が家主にしいたげられる事件などをいちいち取りあげて、彼らのために泥沼の苦闘をつゞけるのだが、彼はまもなく氣づくのである。“罪が有るも無いも、これは富とおなじように相対的なもの

だ。いじめられた間借人たちも、やがて自分が金持の資本家となると、また貧乏人たちをいじているのだ” これは、*The Power and the Glory* のなかで<司祭>が、唯物論的コミュニストの攻撃に答える言葉と発想がおなじである。「あなた自身が善い人にならなければ改革しても無駄でしょう。あなたの黨員たちはみんな善い人とはかぎりません。だから、昔のように飢餓、暴力、利己的な物欲主義があらわれるでしょう」ついでに、「カラマゾフの兄弟」のなかで社会主義者 **Rakitin** が「君は神のことなんか考えるより、市民権の拡張や肉の値段を下げることを考えた方がいい。そのほうが、ずっと人類愛を発揮できるというもんだ」という言葉にたいして **Mitya** が同じような答えかたをしているのはおもしろい。

また **Fowler** (*A Quiet American*) は、暴力行為によってひき起された市民たちの流血の悲惨さに居たたまれず、ついにそれを阻止するために、彼の友人でもある、首謀者のパイルを殺してしまう。これは政治への介入の第一歩であるが、**Fowler** は自分のとったこの行為に疑問をもつのである。「パイルを頼りにしているあの女は、このために悲嘆につき落されるだろう。広場の数人の死体より彼女ひとりのほうが価値少ないときめるとんな権利が自分にあるか。苦悩は数によっては増大しない。一人の人間は、全世界の感ずる一切の苦しみをもちうるのだ。できるなら自分はこの行為をとり消したい」と彼は考えこむ。彼はパイルを殺すことによって万事うまくいったのに、何んともやるせない気持ちになる。グリーンにとってはめずらしく政策批判的なこの小説でも、彼の目はつねに人間の不幸や悩みを、政治とは別な次元から、見つめることを忘れない。政治は数を問題とするが、彼にとっては人間ひとりの存在が世界大の価値をもっている。また **Fowler** が監視塔のなかで殺されるベトナム兵の絶叫を聞いたとき、彼の胸に、政治への怒りがつきあげてくるが、彼は同時にまた「世界いたるところで、これと同じ絶叫がひびいている」ことを思うのである。政治によっては解決できない心の苦悶というものがいたる処にあることを言っているのである。

さて、話を **Scobie** にもどそう。彼は、幼い子供が、40日間にわたる悲惨な飢えと渇きの漂流のあと悶え死んでいくのを見たとき、彼の心をなやますもの

は、**“神が愛であるなら、なぜこのような残忍な、長い苦しみが、罪のない子供に与えられるのであろうか”**ということであった。これが **Scobie** の反応のしかたである。**G. オーウェル**は、人間の不幸をたくさん描いたが、彼の意識はつねに例外なく社会悪に向けられていた。したがって社会の改革が、**オーウェル**の不幸にたいする反応のしかたであった。ところが、**グリーン**の人物が身に感ずる不幸は政治のとどかない分野においてである。この **Scobie** の問題にしても、もし戦争という外的原因がなかったら、これら遭難者たちの不幸、子供の悶死もなかったであろうが、彼らがすでに受けてしまったこの苦しみは取りけしがきかない。これは肉体人間が背負わされている**“腹立たしい”**運命の不条理である。**“不幸こそ我々人間が、真に属している世界である”**それかと言って、**Scobie** はカミュ的人間には属しない。カミュはこれら不条理（人間には凡て死が宣告されているということを頂点とする）の認識に立って、生存に形而上の意味を否定し、希望なき反抗の連帯を説くが、**Scobie** は不条理になやみながらも、人間個々の救いを神のなかにおいて考えようとする。これが、彼の人間苦にたいする意識的姿勢である。（初期の作品**“The Man Within”**のなかで **Andrews** は恋人の崇高な死にかたに出会って、**“短刀も殺すことのできないある不滅なもの”**を感ずる）**Scobie** は、**“神よ、なぜあなたは、あの子を溺死させなかったのですか”**と悩むことがあるとしても、**<神>**は、つねに彼にとって、生命放棄さえも決意させる絶対の倫理であることには変りがない。

Scobie を失った **Helen** の悩みはどういう形であらわれたであろうか。彼女はもうどんな人間も愛せなくなる。**Scobie** だけはほんとうに愛していた。しかし**“死んだ人間は愛せないではないか。死んだ人間はもう存在しないからだ”**死は一切の価値の絶滅を意味する。しかし、一人の人間にさゞげられた愛が、ほんとうに永遠であるためには神がなくてはならぬ。**“神を信じたい欲求が彼女のなかで子供のようにのたうった”** **<愛>**は**グリーン**の中では絶対の価値として追求される。遊びがない。だから、神なくしては、**Fowler (A Quiet American)**の肉愛は、捨てられるという恐怖に脅かされ、**Maurice (The**

End of the Affair) のそれは、みずからの憎悪心に復しゅうされる、という風に描かれるのである。

最後にふたたび、Scobie の人間像を別の角度から考えてみたい。彼の絶望感が、彼の底知れぬ善意に由来することは前述のとおりであるが、それだけではなかったことは、あの<神>と彼の対話のなかで確かに暗示はされている（すなわち彼は“神を愛した”が、自分が死なないでヘレンから去った場合、それから生じる彼女の苦しみについて、彼は“神のはからいに任せることができなかった”のである）しかしグリーンは、この事よりも、Scobie の人間愛につよい聖性のしるしを見ようとしたのは明かである。しかし、このグリーンのねらいが、力づく読者の心に伝わってくるかどうか、私には少々疑問である。Scobie の地獄落ちをも辞さない、他苦へのすさまじい同情に我々は胸をうたれるが、いっぽう我々はその愛の発現のしかたに余りにもネガティブな要素を感じないだろうか。神は彼にとって、内部から彼を律する最高の良心のごとくであったが、この厳しい内部律が、彼の苦への共感と行動に、いつも何かしら暗い苦渋の影を与えているのである。それは、“自分の責任”というある種の自我意識が、大らかで積極的な愛の流露をさまたげているからである。「カラマゾフの兄弟」のなかで、Mityaは、地下に働く流刑者たちの苦しみを自分も分ちもち、やがては彼らの凍えた心に愛の火を点じようと思う。そして幾千の苦悩のなかで、生きることの喜びを、彼らと共に<神>から受けようと決心する。このMityaの受苦精神はポジティブな輝きが底流しているが、Scobieのそれにはひどくネガティブな陰湿さが感ぜられて、彼の人間愛に、一種不毛の印象さえ受けるのは否定しがたい。このことは、多少ともThe Glory and the Powerの<司祭>についても言えることである。初期の作品The Man Withinのあの朗々とした、死をも乗り越えるオプティミズムが、後の作品になるにしたがって“かげり”を帯びてくるのは、グリーンの深まっていくリアリズムがそうさせるのであろうか、それともである。

The End of the Affair においても<愛>と<神>の問題が徹底的に追求

されている。The Heart of the Matter とおなじ三角関係が扱われているが、様相はまったく逆である。神を信じない Sarah は愛欲に生の喜びの一切をかける。一切をかける、その熾烈さによって彼女は、かえって愛欲のよるこびの不安定性にぶつつかり、未だかつてないほどの不幸を感じず。裏切りのない、死によっても滅びることのない、常にふととうする愛といういのちの実感とは<神>以外にあるだろうか。情夫モオリスへの愛欲のなかにひそむ彼女の一片の愛の真実を手がかりとして、或る日彼女に愛の転換がはじまる。“まことの愛は終ることがない” それは肉体と共に始まり、肉体と共に終るものではないことに気づく。“もし神を愛することができるなら、私は、夫とモオリスの二人を同時にほんとうに愛することができるのだ” 彼女はこうしてモオリスから去っていく（それは死という火の試練をともなったが）そして彼女は、しつとに狂うモオリスに、ひそかに神の平和が与えられることを祈る。冷たい夜の雨にうたれながら、こゝろの内部に射しはじめる、新しい愛のひかりの訪ずれをじっと見つめる Sarah のすがたは、感動的である。彼女は、さらにまた、ある男の醜い赤あざに接吻し、イエスの受苦の意味をさとるに至る。そして“自分の美しい肉体など取るにたらないものだ” と思う。こうした Sarah のつきつめた、愛への迫りかたは、やはりグリーン的人間の典型である。

彼ら（グリーン的人間）は<愛>に関するかぎり、中途半端な態度をとらない。そのために彼らの行きつくところが、たとえ死であっても、その死は彼らにとって新しい生の出発であって、終りとはならない。Querry (A Burnt-Out Case) もその一人であった。人生のあらゆる事がらの虚しさ、うそを知りぬいた彼が、失なった神をふたゝび感じたのは、衰れな指のない黒人癩患者を夜の沼池から救いだしたときであった。それから後、彼の暗い意識の底で<神>は彼が最後にたどりつくべき心の故郷となる。彼が或るひとりの女の孤独なくなるしみを見たとき、彼の愛しかたは、聖者の愛しかたに近かった。「人は、他の苦しみをあえて苦しむことによってキリスト教の神秘にあずかる」そのような愛のために彼が殺されたとき、はじめて彼に故郷への道がひらけたのであろうか。彼はふしぎな笑をのこして死んでいく。

The Power and the Glory のなかでは、いったん死の追跡をまぬがれた<司祭>が、混血土人の卑劣なわなと知りつゝも、ある殺人者の最後の告白をきいてやるために、死地に逆もどりしていく。彼の首には200ペソの資金がかけられている。“かわいいような男、この男はほんとうはそんなに悪くないのだ” 司祭は、この土人が生活に困らなかつたら、こんなに墮落することはなかつたらろうと思う。“この男は、必要な金のために私を裏切ろうとしているが、自分は神を裏切ったではないか” <司祭>は、かつて姦通を犯したことのある自分、いつも飲酒のゆうわくに負ける自分、“悪がマラリヤのように血管をながれている” 救いがたい自分をかえりみる。そのような彼は、いっぽう、殺人者の罪にさえ責任を感じ、臨終時の告白をきいてやるために、裏切る土人の案内で、あえて再び敵のもうける死のわなに落ちていく。“この世にひとりの呪われた人間（殺人者）でもいる限り、自分もまた呪われているのだ” これは、まさにグリーン的人間を特色づける受苦の精神である。

この作品における<司祭>の、自己内部の悪徳との果しない闘争をとおして死の自己献身に至る道すじは、彼の処女作 *The Man Within* からすでに始まっている。ただ後者では主人公 *Andrews* がいかにも英雄的な昂揚感にみたされて死に面するのに反して、前者は、すこしも、魂の勝利感をもたないのである。それどころか彼は自分の一生が完全な失敗であること、“誰のためにも何ひとつなしえなかった”ことを思う。処刑の前夜、一びんの酒に恐怖をまぎらせながら、彼は牢獄で祈る。そしてその祈りにおいて、またもや挫折する自分に気づいて、暗然とする。何度祈っても、彼の祈りはあとに残す自分の娘の魂の救いにしか集中しないのである。“あの土人、死刑執行者、歯医者、世界のあらゆる魂が自分の祈りを必要としているのに……” 彼は抜きがたい自分のエゴイズムに悲観する。決定的な没我の愛をいくつか成しとげながら、なお自分のこゝろに巣くう悪徳の一片に血をながす、このすさまじいばかりの倫理性は *Scobie* と司祭において頂点に達している。

こゝにおいて私は、司祭の絶望感について考察しないではおれない。彼は、自己にとって能うかぎりの<愛>をなしたにもかゝらず、なぜ、このような

絶望感にうちひしがれねがならないのだろうか。“自分を拒絶する聖人たちの冷たい顔”さえもが彼にうかんでくるのである。このことは、Scobieについても言えることである。死をもっての彼らの自己献身が、神から見ずてられたという寂莫のきわみで報いられるのであるから、読者はひょっとしたら<没我的な愛>というものゝ無力さを印象づけられはしないだろうか。グリーンのねらいは、もちろんそういう処になかった。それどころか彼は、独自の手法をもって、二人の「たましい」にひそむ神性の輝きを浮彫りにした。これは、キルケゴールの言う“絶望のなかにあることさえも意識しない絶望”の病におかされた現代人への痛烈な告発であるかもしれない。しかし、それでも私には、彼らのひどい罪悪意識が、あるいはそれ以外の何かに起因しているのではないかと思われるのである。キリスト的受苦は、恩寵（神の絶対的愛とゆるし）の喜びにうらづけられなくては自虐行為となる。カトリック教義によれば、大罪を犯して、悔い改めずに死んだ者のたましいは、もう絶対に救いの機会がなく、永遠の地獄に落ちるのである。このような神の呪い、罪の恐しさが、まちがった固定観念となって<恩寵>の感覚を傷つけてしまうことがないだろうか。受苦精神（神的愛の流出）は法悦（神的愛の流入）によって、はじめて豊かで強じんなものとなる。神のみ手は、地獄の底には差しのべられないと二人は信じているのだろうか。彼らの愛の喪失感はあまりにもみじめである。

とにかく原因が何であれ、罪意識、あるいは苦意識は、グリーンにあって、均衡を失って強調されている気がする。作中人物の、この上ない「たましい」の高貴さは、もっと豊かな恩寵の光りを受容するとき、さらにいっそうの輝きを増しただろうと思われる。

最後にグリーン的主要作品に一貫してみられる彼の生追求の特質中、最も大きなひとつを述べてみたい。彼のえがく諸人間像が、それを中心として動く主題は、神の意識なしには考えられない<愛>の問題である。それは、大抵の場合、人間の根元的な苦、悪、肉的爱の不安定性への自覚からきている。彼の世界では、愛は、物質的生活にかゝる政治的、社会的行為として表現されず、あくまで内面の存在として、それ自体が重視されている。直接このことに

関して、無神論者と司祭の対話のなかで言及してある部分を **The Power and the Glory** からひろってみよう。無神論者「神が貧しい人間たちにパンを与えたことがあるか？ 我々は寄生虫的な僧侶や教会をぶっこわし、貧者を富まし、彼らに正しい思想を与えるのだ」 司祭「そしてその後はどうなる？」「その後は死ぬだけだ。無だ」 司祭「私たちが貧しかろうと富んでいようと、私たちの不幸はいっこう変らないだろう—私たちが聖者とならないかぎり、この世のわずかな苦しみは悩むに足らない。たしかに飢餓は富と同様に人間を墮落させる。だから私たちは人々が飢えないように努力しなければならない。しかし彼らをそれ以上にすることは、金持とおなじように貧者が天国に入ることを困難にさせるだけである」

グリーン的人間は、生の本質を苦とみる。それは外的・政治的手段によっては解決されることのできない人間の内奥に根ざす苦であり不幸である。その根を取りのぞかないかぎり、人間には永久に苦がつづく。彼の作品中では、この世的な幸福は生の真相をくらます、かりそめのイリュージョンとして問題にならない。（このキリスト教の樂園喪失の原理はヒンズイズムや仏教の無明説を思わせる） 唯物論者にとっては、この世の **physical** な幸福こそ唯一のものであり、人間の行為と思想はすべてそれに直接つながるものでなくては意味がない。グリーン的人間にとってはそうではない。彼には不可避の死があり、愛憎、美醜にかゝわる人間の苦惱がある。これら不条理からの脱出のみちは物質的な方法によっては見出されない。このことはグリーンの観念のなかでは、明らかに解決ずみのことである。すなはち、

"There are celestial bodies and there are terrestrial bodies; but the glory of the celestial is one and the glory of the terrestrial is another. It is sown a physical body, it is raised a spiritual body." (I Corint. 15)

このパウロの言葉はまたグリーンの心であろう。だからグリーン的人間たちは、現世それ自体に目的をみない。それは始まりであって、終りではない。彼らは永遠の相のもとで存在のありかたを追求しているかのように行動する。美しいSarahが、男の顔半面にわたる、ただれた赤あざに接吻することや、司祭が、

自分を売ろうとする土人の肩にやさしく手をかけていたわることは、ただそれだけで、それは、かけがえのない大きな行為となる。グリーンの世界では、実利は問題とならず、人間の＜内部＞の純粋性と愛のふかさに一切の重みがかけられている。司祭は最後の夜、“重要なことは、ただ一つだけある。それは聖者たることだ”ということを知る。この司祭にかぎらず、Andrews, Scobie, Sarah, Querry たちはそれぞれの程度に応じて聖者たるの一步をふみだしているのである。（Fowler できさえも根元苦にめざめるという点において、彼らと別個ではない）

それなら聖者たるのしるしは何んであろうか。それは必ずしも政治的ではない。政治家は、みせかけの信者とおなじように自己満足のイリュージョンを食って生きるとさえグリーンは言う。聖者たるのしるしは、人間ひとり、ひとりのもつ＜実存＞の尊厳さへの自覚であろう。肉体によって先行される実存ではない。肉体に先行する＜実存＞である。愛は、グリーンにあっては、＜実存＞の本質であるゆえに、肉体的でない。したがって、それは感覚やマインドの領域を超えて、絶対性の価値を帯びる。愛の物質的効用よりも、愛において、愛する者と愛される者とが、自己の実存を完成していくことが重要なのである。“人間は神のすがたに型どって造られた”（God said, Let us make man in our image, after our likeness — Genesis 1,26）は重大なキリスト教の奥義であるが、これが人間の実存である。そして、このことが正にグリーンの＜愛＞の概念の心臓部であると私はみている。そうみる端的な根拠を彼の作品中から二・三ひろってみよう。

(1) Oh God, he thought, I've killed you; you've served me all these years and I've killed you at the end of them. *God lay there under the petrol drums. — The Heart of the Matter*”（人手にかゝって死んだ召使アリは Scobie の目には神であった）（註。イタリックは便宜的にしたもの。以下おなじ）

(2) If I could love you (=God), I could love Henry. *God was made man. He was Henry with his astigmatism, Richard with*

his strawberry mark, not only *Maurice*.—The End of the Affair
 (I は Sarah; Henry は彼女の夫; Richard は赤あざの無神論者;
 Maurice は彼女の情夫)

(3) But at the centre of his own faith there always stood the convincing mystery—that *we were made in God's image*—*God was the parent, but He was also the policeman, the criminal, the priest, He (God) would sit* in the confessional and hear the complicated dirty ingenuities which *God's image had thought out*: and *God's image shook now*, up and down on the mule's back, with the yellow teeth sticking out over the lower lip, and *God's image did* its despairing act of rebellion with Maria in the hut among the rats. . . . He (The priest) said, 'Do you feel better now? not so cold, eh? Or so hot?' and pressed his hand with a kind of driven tenderness upon *the shoulders of God's image*.—The Power and the Glory (司祭は自分を裏切ると知っているのに土人を自分のらばに乗せてやり、自分は足に血を流しながら歩く。こゝでは、マリヤと姦通した自分も、また自分を死の手にわたす、憎むべき土人も、ひとしく神の<みすがた>である。彼は愛の思いに駆られて敵である土人の肩に手をかける)

まず、私は、以上の引用文にみられるグリーンの発想法が、あまりにもヴェーダ思想や仏教思想のそれと類似しているのに驚く。むしろ完全な一致でさえある。ヒューマニズムの根源の同一性について考えさせられるものが大いにある。参考までにインド経典より引用してみよう。"Thou (=God) art the man, Thou art the woman, Thou art the very man who walks in the pride of youth, Thou art the old man tottering on crutches, Thou art in everything, Thou art everything, O Lord,"
 さて、聖書によれば、the image of God は人間内在のキリストである

(2 Corint 4) 我々の肉体は引きあげられて霊体となる。すなはち栄光のうちには the image of God を顕現するのが人間の窮極の目的である。(1 Corint.3) この顕現されるべき the image of God (= Christ) はあきらかに地上的存在を超えたものである。上の三つの引用でも分るように、グリーンの〈愛〉の核心は、人間ひとり、ひとりに内在するキリストへの認識にもとづく。この内在キリストにおいて、自と他は真の意味において一つとなり、あらゆる処にキリストが生き動いていくのである。すなはち、この自覚においてはじめて〈愛〉が絶対の尊厳性を持つのである。救いの根本は、人間がこの〈実存〉の神秘にあずかり、おのおのの〈実存〉を成就することである。このことは、グリーン の 作品 を 理解 する うえ に 重要 な 鍵 とな っ て いる 。

「ペスト」(カミュ)の主人公リユーは医者であるが、彼には犠牲者たちと苦しみを共にした愛のよろこびがあり、恐るべきペストを撲滅した歓喜があったが、それにもかゝらず彼は、人間たちの勝利が、つねに死という窮極の敗北におびやかされているのを感じていた。永遠の真理すなはち神を拒否するカミュ的不条理人にとって、「人間は死刑囚であり、彼らの日々の闘争はすぐに鎮圧される反抗」である。このはかない反抗にしか彼らの生きる希望がない。グリーンは、人間の救いをそのような現世にみない。無神論者 Colin (A Burnt-Out Case) の言う「希望があらゆる健康な人間の深部にも育っている癌腫」でなくなるためには、一切が、この人間の〈実存〉をつかむか否かにかゝっている。グリーン的人間の〈愛〉と絶望をめぐる孤独なこゝろの闘いは、すべてこの根源からの幽暗なひゞきのなかで行われるのである。

(昭和41年9月30日受理)